様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月２８日現在

機関番号：３２６９３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５９２８３８
研究課題名（和文）　出産に対して形成されるイメージの言説分析―産科医療危機を打開する新たな方略―
研究課題名（英文）　Discourse analysis of the images of childbirth in the postwar Japan: A new strategy to overcome present crises of women's reproductive care
研究代表者
谷津　裕子　（YATSU HIROKO）
日本赤十字看護大学・看護学部・教授
研究者番号：90339771

研究成果の概要（和文）：
戦後における出産のイメージ形成に影響を及ぼしている言説を、医療・社会システムとの関連性に着目しながら分析した結果、出産イメージ形成に影響を及ぼした６つの言説は、出産の「自然性」に対する様々な価値観のせめぎあいを反映していること、出産の「自然性」に付与される意味は、日本の政治経済的・人口動態的動向、母性イデオロギー、医療における権力関係から影響を受けていたことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study was to analyze the discourses that have affected the creation of the images of childbirth in Japan after World War II focusing on the influence of the medical social system. The result showed that in the 6 discourses (1) diverse values of "naturalness" of childbirth were recognized, and (2) they were significantly influenced by the politico-economic and demographic movement, the maternal ideology, and power relationship between health-care professionals.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総　計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学
キーワード：助産学、看護学、産科医療、出産、言説分析、安全

１．研究開始当初の背景

2008 年 10 月 27 日，脳出血を発症し死亡した妊婦が，東京都内 7 病院に受け入れ拒否をされていた事実が発覚した。受け入れ拒否と死亡の因果関係は定かではないが，総合周産期母子医療センターを含む大病院が多数存在する東京都で，いわゆる「妊婦たらい回し」が生じたことは世間に大きな波紋を呼んだ。この出来事は，「産科医療の崩壊」や「お

産難民」などの言葉が流布し，少子社会でありながら子どもを安心して産めない矛盾した現実を端的に示すもので，多くの国民に不安と怒りを与えた。

産科医療が危機に瀕している要因の一つに産科医の不足があるといわれ，その原因として産科医の過重労働，低賃金，医療訴訟の多さなどが指摘されている（岡井，2008）。国や地方自治体，学会等はそれぞれに対策を講じているが，一人前の産科医を育成するには最低 10 年かかり，今いる産科医への待遇を改善して離職率を減らすにしても現在以上の状況改善は望めないことから，今後は産科医充足以外の観点から問題解決の糸口を探ることが重要である。

その糸口の一つが，出産に対する一般の人々のイメージ形成過程にある，と筆者は考えている。

2004 年の統計で，産婦人科の訴訟件数は 151 件で，訴訟頻度は 12 診療科中１位となっている。お産は，無事に産まれたときとそうでないときとで生じる感情の落差が激しい。近年では産科・周産期医療の進歩により母子の死亡率が著しく改善され，出産に対して人々が「無事に産まれて当たり前」「異常の発生はあってはならない過ち」という“安全神話”をもち，結果の悪さと医療事故を結びつける傾向が強い。

WHO の調査では，全出産の 80～90%は正常に経過するが 10～20%は正常から逸脱し，何らかの産科医療的介入を要することを示している（Wagner，1994/2002）。日本では 1990 年代後半から高齢出産が増加し，ハイリスク出産や低出生体重児の占める割合が増え，産科医療を必要とする異常妊娠・出産率は WHO の発表よりも高率であると推測される。もしも上述のような“安全神話”が一般的であるのなら，出産をめぐる深刻な現状と出産に対する期待のあいだに大きなギャップが生じ，産科医療に対する不信感を生み，医療訴訟の増加へとつながるだろう。

しかし，そのような“安全神話”の存在はあくまで推測的であり，上記の仮説を裏付ける資料は少ない。そこで本研究は，戦後におけるわが国の出産のイメージ形成に影響を及ぼしている言説を、医療・社会システムとの関連性に着目しながら明らかにすることを目的とする。

（文献）

・岡井崇（2008）．産科医療危機の現状とその要因．医療安全，16，26-31.

・Wagner, M.（1994）／井上裕美・河合欄監訳（2002）．WHO 勧告による望ましい周産期ケアとその根拠．メディカ出版.

２．研究の目的

本研究は，産科医療における危機的状況を打開する新たな方略として，戦後における出産のイメージ形成に影響を及ぼしている言説を、医療・社会システムとの関連性に着目しながら明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

テクストの収集・分析は Fairclough(1995) の批判的言説分析の枠組みに従い，以下の 3 段階で行った。なお，本研究では，日本の出産環境が大きく変化した過去 60 年間のテクストを対象とした。

(1)　第１段階：テクストレベルの分析

文献から得られるテクストを主たる対象とし，研究課題を後方視的に追究した。

(2)　第２段階：言説実践レベルの分析

第１段階で明らかにされた事柄のうち，特に注目すべき時代や現象に関与する妊産婦や出産経験者，医療従事者を対象

に聞き取り調査を行った。

なお、聞き取り調査に先立ち、日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号 2009-59）。

（3） 第 3 段階：社会文化的実践レベルの分析

第 1 段階と第 2 段階の結果を統合し，戦後における出産のイメージ形成に影響を及ぼしている言説を医療・社会システムと関連づけながら分析し，体系づけた。

（文献）

・Fairclough,N.(1995). *Critical Discourse Analysis*, Longman Pub.

４．研究成果

（1）第 1 段階

文献調査の対象は、出産関連の新聞記事については 1946～2009 年発行の 10 誌から抽出された 231 単位，妊産婦対象の情報誌については 1999～2009 年発行の 2 誌から抽出された 1,759 単位であった。その他，妊産婦対象の書籍，医療・社会学・文化人類学等の専門書，学術論文，専門誌の解説記事，行政発行の文書，出産関連団体の発行物等からテクストが抽出され分析された。

これらのデータを年代別（10 年刻み）に整理し，出産のイメージを描写する言説の特定化を行うとともに、諸言説の背後にある社会文化的実践を〈出産の場〉〈出産の主な担い手〉〈出産立ち会い人〉〈痛みへの向き合い方〉〈分娩体位〉〈産科学・助産学〉〈産科医療（体制）〉〈産科医療（機器）〉〈新生児・未熟児医療〉〈不妊治療〉〈母子保健施策の変遷〉〈健診・教室〉〈出産に関連した社会現象〉〈人口変動〉〈母性保護政策・法律〉のカテゴリーで分析して，【出産イメージの言説形成】の概念図を示した。

（2）第 2 段階

聞き取り調査では、出産経験者 3 名、医療従事者 5 名（助産師 3 名、産科医師 2 名）、計 8 名からデータを収集した。医療従事者・出産経験者が語った出産のイメージ形成に影響を及ぼしている言説は、【作られる自然―医療介入が出産を守る】、【女性の中に眠る自然―成せばなる、成さねばならぬ自然性】、【天為としての自然】、【不安の再生産装置】、【職種間葛藤の舞台裏】、【人々の間で育まれる自然―信頼関係で切り抜ける】の 6 つのカテゴリーに類型化された。

（3） 第 3 段階

文献調査と聞き取り調査の結果から、戦後 60 年間に生じた出産を取り巻く社会状況と医療環境の変化のなかで、出産のイメージに影響を及ぼした以下の 6 つの言説が浮かび上がった。

① 言説 1：作られる「自然」―医療介入が出産を危険から守る
- 先回りする医療介入が出産を危険から守る
- 必要最小限の医療の支援が出産を危険から守る

② 言説 2：女性の中に眠る「自然」―成せばなる、成さねばならぬ自然性
- 「自然」を勝ち取るのは母親の努力次第
- 「主体性」が「自然」を覚醒する

③ 言説 3：不安の再生産装置としての出産
- 「怖さ、危うさ、予測不可能性」に立ち向かう志
- 少子（化）社会の映し鏡

④ 言説 4：天為としての「自然」
- 「助からない」は当たり前
- リスクを前提とする医療者と消費者の動き

⑤ 言説 5：職種間葛藤の裏舞台

- 開業助産師 vs 産科医師
- 勤務助産師 vs 産科医師
- 開業助産師 vs 勤務助産師
- 自然志向の産科医師 vs 医療志向の産科医師

⑥ 言説 6：人々の間で育まれる「自然」－信頼関係で切り抜ける。

- 選べない環境で生き残る知恵

本研究を通して、出産のイメージが様々な言説の組み合わせから形成されており、それらの言説には日本の政治経済的・人口動態的な動向や母性イデオロギー、医療を権力関係から影響を受けていたことが明らかとなった。出産は病気ではなく人間として自然な営みであるといわれるが、出産年齢の高齢化や医療技術の高度化が進む現代において出産の「自然性」のとらえ方に大きな変化がみられている。産科医療の提供者と消費者の双方が出産の「自然性」について語り合い出産イメージの相互理解を深めて、出産の安全を形成していくことが望まれる。

戦後 60 年間に生じた出産を取り巻く社会状況と医療環境の変化についてうかがい知ることのできる文献の種類と数は膨大であり、関連する人々への聞き取り調査も多岐にわたる。本研究はその試みの第 1 歩であり、今後もデータの収集と分析を続け、研究成果の精錬化を図っていきたい。将来的に研究の全容をモノグラフとして公表することを目指している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
谷津　裕子（YATSU HIROKO）
日本赤十字看護大学・看護学部・教授
研究者番号：90339771

(2)研究分担者　なし
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者　なし
（　　）

研究者番号：

(4) 研究協力者
濱田　真由美（HAMADA MAYUMI）
日本赤十字看護大学大学院看護学研究科博士後期課程